

スキーオリエンテーリング世界大学選手権 2022
報告書

WORLD UNIVERSITY CHAMPIONSHIP SKI
ORIENTEERING

Jáchymov, Czech Republic

22-26 February 2022

目次

1.大会概要	3
2.ごあいさつ	5
3.大会に向けての準備	
石原湧樹(東京大学)	7
佐野響(筑波大学)	9
道坂怜生(大阪大学)	10
清水嘉人(北海道大学)	11
高木一人(北海道大学)	12
4.競技報告	
スプリント	14
パシュート	16
スプリントリレー	18
ミドル	21
5.コロナ禍でのスキーO 大学選手権大会	24
6.チェコの旅について	26
7.競技結果	29
8.大会風景	31
9.エントリーと遠征費用について	35
10.寄付金報告	38
11.おわりに～日本チームを支えてくださったみなさまへ～	39

1.大会概要

大会名 : 2022世界大学スキーオリエンテーリング大会
(2022 FISU World University Championship Ski Orienteering)
主催 : 国際大学スポーツ連盟 (FISU)
期間 : 2022年2月22日-2月26日
場所 : チェコ共和国・ヤーヒモフ
参加国 : 12
(ブルガリア、チェコ、エストニア、フィンランド、ドイツ、ハンガリー、ノルウェー、ロシア、スイス、スロベキア、スウェーデン、日本)
大会ホームページ : <https://wusoc2022.cz/>

日程と種目

2月22日(火) 開会式、スプリント(男子・女子)(個人戦)
2月23日(水) パシュート(男子・女子)(個人戦)
2月25日(金) ミックススプリントリレー(男女混合団体戦)
2月26日(土) ミドル(男子・女子)(個人戦)、閉会式

種目の説明

スキーオリエンテーリングは決められた距離を滑るのではなく、優勝設定タイムを想定して距離が決められます。

スプリント : 優勝設定タイム 12-15分
(例: 男子 3.6km、女子 2.8km)、時差スタート

パシュート : 優勝設定タイム 35分程度、時差スタート

スプリントリレー : 優勝設定タイム6~8分/走順

(例: 男子 2km/レグ、女子 1.5km/レグ) 2名1組のチーム戦。
女子が最低1名含まれ1走、3走、5走を担当する。もう1名は2走、4走、6走となる。1走は全チーム一斉にスタートする。

ミドル : 優勝設定タイム 35分程度、一斉スタート



スキーオリエンテーリング競技のようす。背後に見えるフラッグが、必ず通過しなくてはならないコントロールを示している。

世界大学スキーオリエンテーリング大会の説明

第1回 2016年 開催国・ロシア（参加日本選手 女子4名/男子4名）

第2回 2018年 開催国・エストニア（参加日本選手 女子4名/男子4名）

第3回 2020年 開催国・フィンランド

（大会中止：新型コロナウイルス感染症まん延による）

第4回 2022年 開催国 チェコ（今回）

2.ごあいさつ

(公社)日本オリエンテーリング協会 スキーオリエンテーリング委員会

委員長 柴田達真

この度は、チェコ共和国ヤーヒモフ市で開催された世界大学スキーオリエンテーリング選手権大会への参加にあたり、多大なるご支援・ご声援を頂戴いたしまして、誠にありがとうございます。

2020年より続くコロナ禍により、2020年3月に開催予定であったフィンランドでの大学選手権は中止、2021年1月に開催予定であったユニバーシアードが12月に延期開催予定であったもののオミクロン株の急拡大により開催1週間前に中止が決定されるなど、世界大会を目標に鍛錬を積み重ねてきた学生にとって活躍の場を奪われる2年間となっていました。本大会もオミクロン株の影響による中止、あるいは渡航中止の判断が必要である可能性を危惧いたしました。FISUやIOF、その他大勢の大会運営者の努力の結果、大会が厳密なコントロールの元（バブル方式）開催されることとなり、日本からも無事に男子4名、女子1名、オフィシャル2名の日本代表選手団を派遣することが出来ました。

日本国内では様々な制約もあり、合宿形式等でのトレーニング機会を十分に準備できたとは言い難い状況ではありますが、選手は相当な覚悟を持って各自トレーニングに励み、それぞれがベストな状態で大会に参加してくれたものと思います。選手各自の努力に敬意を示すとともに、ご理解・ご協力を賜りましたご家族、学校やクラブ関係者の方、寄付等ご協力を頂いた皆様、その他関係者の方々に改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

スポーツには、健全な肉体だけではなく、健全な精神を育成する力があります。たとえ言語や文化の壁があったとしても、同じルールの中で競い合い、讃え合い、交流を図り、お互いに研鑽していくことは、特に若い大学生にとって、大

いなる意義があります。今回はコロナ禍により他国の選手と積極的な交流ができない制約もありましたが、様々な困難を乗り越えて日本代表として大会に参加したことが、各自にとって、アスリートとしてそして、一人の人間として、今後の大きな糧になることを期待しています。

2027年よりスキーオリエンテーリングがワールドユニバーシティゲームズ(2021年にユニバーシアードより改称)の正式種目として採用されることが決定しており、2026年には日本での世界選手権大会の誘致も計画されています。スキーオリエンテーリングをオリンピック種目とする活動は継続されており、この継続的なチャレンジが報われる日も近づいているものと感じています。日本のみならず、世界のスキーオリエンテーリングを盛り上げるために、皆様の一層のご協力・ご支援・ご声援を頂戴できますと甚幸です。

3.大会に向けての準備

石原湧樹(東京大学)

今大会では、旧図が “Jahodova Louka” と “Eduard” の 2 枚公開されていた。このうち “Jahodova Louka” は地形が非常に急峻で、実線の圧雪路のほかには、北部の一部を除いてネットワークのできそうにないテライン、“Eduard” は、北西半分は大きな沢があって急峻な一方、南東半分は平坦で鉱山の操業跡の凹地が点在するテラインだった。開催告知 “Bulletin 0” の情報では、競技は “Jahodova Louka” と旧図のない “Abertamy” で行われ、“Eduard” はトレーニングエリアとされることになっていた。そのため、試合は主に、中欧に特徴的な（地図でしか見たことがないが）急峻なテラインに、実線中心のあまり密でないトラックがあり、ルートチョイスとクロスカントリースキーの走力が問われるものになると予想していたし、他の選手や関係者にもそう吹聴していた。

しかし開会直前にホームページに掲載された “Schedule” および**モデルイベント当日**に公開された “Bulletin 2” によって、スプリントリレーは “Jahodova Louka” で、それ以外のすべての試合は “Eduard” で行われることに変更されたことが判明した。実際に、スプリントリレーは “Jahodova Louka” 北側の比較的急峻でない場所で行われ、ほかは “Eduard” 南東側の大変平坦な場所で主に回されるコースだった。結果的に、予想していたものとはまるで逆の、登距離が少なく、狭い圧雪路中心の、ナビゲーションとショートカットの能力が問われるコースであった。無論、本大会後に世界選手権大会なども予定していたので、これらの能力の向上を疎かにしたわけではないが、我が誇るべきゴリラ力を最大限発揮できるとワクワクしていたものの期待外れに終わった。一方オリエンテーリングとしては、予想よりも大変楽しいものであった。

以上の経緯があるため、自分の準備としては、特にこの大会に向けて行ったものは、実線トラック中心のチェコの地図をネットで見つけてルートチョイスの練習を行ったことくらいである。そのほか、主に、ユニバーシアド（中止）と世界選手権大会を目標に行ったトレーニングを以下に記す。

夏季：筋カトレーニング、ローラースキー、フットOなど。特に、冬に向けた身体づくりを主な目的とし、筋カトレーニングに力を入れた。フットOでは、スキーOでトラック以外の情報をより簡単に用いるための訓練として、周辺の情報をよく見ることを意識した。また、腹筋地図読みを毎週行った。

秋季：夏季と同様だが、筋トレの割合を減らし、ローラースキーなどは強度を上げた。

初冬：ユニバーシアードが12月上旬から始まる予定だったので、12月上旬までに3週間北海道に滞在し、雪上で滑り込んだ。具体的には1.5~2.5時間の持久走、30秒~10分のインターバル走などを行った。また、読図走、8の字や2つの楕円を用いた地図読み練習を行った。

冬：1月はフィンランドとブルガリアに合計4週間遠征し、国内大会やワールドカップに出場してスキーOの機会をできるだけ多く設けた。

佐野響(筑波大学)

<シーズンオフ>

昨年はコロナウイルス感染拡大の影響もあり、トレーニングを十分に行えなかったため、基礎的な筋力の低下が問題であると考えた。学生最後の年としてスキーOに真剣に取り組むと決め、筋肉量の増加・心肺機能の向上を課題として設定した。フィジカル面については、体幹トレや簡単な筋トレ、ランニングなど毎日体を動かすことを意識して生活した。ナビゲーション面については、オリエンテーリングの大会に参加し、実地でのナビゲーション練習を行った。また、毎週オンラインで地図読み会を行い、動きながら素早く地図を読むという練習を定期的に行うとともに、スキーOの地図を頻繁に見るようにした。信原さんが開催してくださったスペシャルフットO合宿では、地図表記やナビゲーションについて学び直し、地図と現地での違和感について学び、その後の大会ではその違和感に注意してレースを行うようにした。夏にはスキーOを行う学生を中心に合宿を企画し、負荷の高いトレーニングを行うだけでなく、モチベーションを高め、シーズンまでトレーニングを続けることができた。

<シーズン>

11月下旬から2週間弱、北海道で初滑りを行った。その後もできるだけ多く雪上で練習できるように休みがあれば遠征をし、スキーOの合宿や大会にも参加した。クロスカントリースキーの練習の際には、長距離走やインターバル、地図読み走などバリエーションのある練習を行った。スキーOの大会では、常に地図との違和感がないかに注意を払い、その上でベストなルートチョイスを行うことを目標にした。

<以上を振り返って>

学生最後の年として気合いを入れていた今シーズンのスキーO遠征は、できる限りの努力をし、全てを出し切ることができたと思う。今までは足底筋膜炎に悩まされていたが、昨年のオフのお陰かシーズン終了まで足裏を痛めることもなく、満足できるトレーニングができた。スピードを上げてナビゲーションすることもできるようになり、スキーO技術の向上を感じることができた。これからは、自身のスキーO力の維持はもちろんのこと、後進の育成にも尽力したい。

道坂怜生(大阪大学)

シーズンオフ：クロスカントリースキーとオリエンテーリングに分けて練習していました。それに加えてスキーの地図読みも行いました。

クロスカントリースキーは大阪大学スキー部に混ざり例年通りの体カトレーニング、筋カトレーニング、ローラーなどでの技術トレーニングを行いました。より具体的には、体カトレーニングは週2回で1回10~15kmのLSDランニング、筋カトレーニングは週1~2回で自重サーキットメニューやウェイトトレーニングやインターバル走を取り入れました。ローラーは週1回、淀川や猪名川の河川敷で15~20kmほど走り体力や技術を鍛えました。

オリエンテーリングに関して大阪大学オリエンテーリング部の地図読みや試合に積極的に参加し、地図読み技術の向上を図りました。関西ロングセレクションの試合にも参加しましたが、意気込んで出たものの競技時間オーバーをしてしまい、森の中での地図読みの遅さが浮き彫りになりました。

シーズン：受験期間と重なり、11月や12月の留寿都での選手権大会前は雪の上に行けませんでした。選手権大会に出場し、代表に選ばれてからは予定していた通り九大戦に参加し、例年通りの雪上トレーニングや試合を行うことができました。また、九大戦後は平日や土日に日帰りで滋賀県の箱館山スキー場に何度も行くことで雪上の体力や技術を落とさないようにしました。就職活動や受験と重なり、まとまって雪上に入ることは出来ませんでした。雪上日数は多く稼げました。

以上を振り返って：世界大会に出場し、他の選手に比べて地図を見ている時間が長いと感じました。クロスカントリースキーやオリエンテーリング単体の技術はもちろん、2つを同時に行う練習が足りていないと感じました。こちらを来年の課題にします。

清水嘉人(北海道大学)

雪のない時期は、フットOのトレーニングとして行っていた体カトレーニング、筋カトレーニング、ローラースキーを使用した練習、地図読みを行いました。加えて、スキーOに取り組む選手で企画している合宿（6月・野沢と11月・旭岳）に参加しました。12月に代表に選ばれてからは、経験者から指導を受けるとともになるべく長い時間スキーを行うことを意識し、近場のコースでスキー練習を行いました。

部活ではフットOを中心に取り組んでいたため、冬季にしか練習を行ってなかったスキー技術の向上が一番の課題でした。6月の野沢温泉大会前後の行われたスキーO合宿で、初めて本格的にローラースキーに取り組みました。スキーで最も大切である「片方の足に体重を乗せる」ことにじっくり取り組み、先輩方のアドバイスもあり良い感覚をつかむことが出来ました。

12月に代表に選んでいただいてからは、大会まで時間が無い中で可能な限りスキーを行う時間を確保することを心掛けました。高木選手と一緒に、札幌近郊のスキーコースや留寿都でスキー技術向上に取り組みました。スキーOで重要となるダブルポールについて特に課題だと感じていましたが、信原氏の指導を受けたこと、その後意識的にダブルポールの練習時間を長くしたことで習得することが出来ました。

結果として、スキー技術向上に重点的に取り組み、大会前に「すごく伸びた」と言っていただけ滑れるようになったことは大きな自信になりました。しかし、地図読みとナビゲーションの練習については、有志で週1回 zoom 地図読みをする以外にあまり時間を取りませんでした。来シーズン以降は、地図読みとナビゲーションに重点をいれて取り組みたいと思います。

高木一人(北海道大学)

自分が日本代表として世界大学選手権大会に出場できるとは思っていませんでした。オフシーズンに納得がいくほど筋力トレーニングを行うことができなかった。他の代表選手と比べて圧倒的に上半身の筋力が不足していると思ったので、代表に選出されてからは少しでもその差を縮めるために、腕立て伏せなどの筋力トレーニングを行った。

また、スキーの技術も他の代表選手と比べて圧倒的に劣っている自覚があったので、代表に選出されてからは、清水選手と共に毎週末のように留寿都や安比、札幌近郊においてトレーニングを行った。特に留寿都では、信原さんや木谷さんなど多くの方々から非常にたくさんのアドバイスをいただき、ダブルポールや体重のかけ方について、以前と比べて見違えるほど上達することができた。これにより、緩やかな上りや平地でのスピードが去年よりも1.5倍ほど速くなったと感じた。また、モービルトラックのような細い道ではダブルポールで進む方が速いので、長時間ダブルポールができる体力をつけるために、1周約5kmのクロカンコースをダブルポールだけで1周するなど、短期間でも効率よく速くなるにはどうすればいいかを工夫しながらトレーニングを行った。

地図読みは代表に選出されてからは毎週地図を最低1つは読むようにし、普段フットOをやっていることの強みを活かして、等高線を意識して自分にとって最適なルートを瞬時に選べるように努力した。スキーの技術がまだまだ未熟な私は、上りで時間がかかってしまうため、上りの傾き具合や上る高さ、上ることで短くできる距離の長さなど、様々なことを考慮して、どのルートが自分にとって一番速くなるのかということ意識して地図読みに取り組んだ。



メキメキとスキー技術が上達。清水選手



Siはタッチフリーでした。高木選手

4.競技報告

スプリント

高木一人

コース：直線 3.3km 最短 4.8km 登距離 45m コントロール数 17

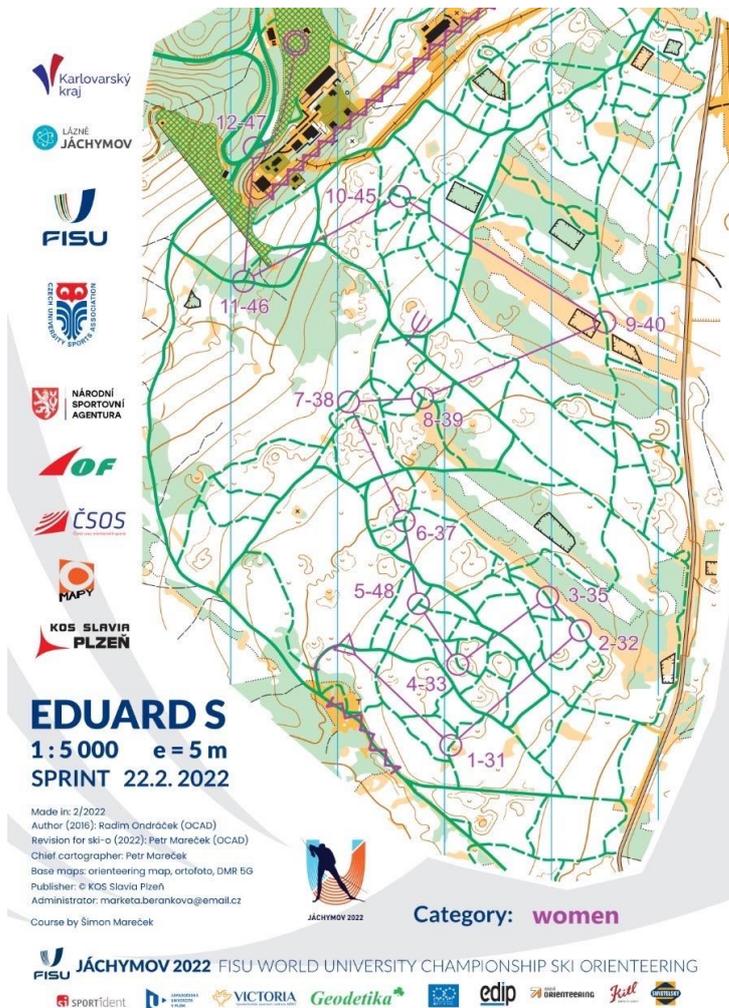
会場から 300m の場所にプレスタートがあり、そこで GPS をつけてもらい、スタート 20 分前になったら約 1km 進んでスタート地区に向かって、スタートという形式だった。旧図でトレインの地形を予習していた際に、高低差があり、どのレースも登距離が多いタフなレースになるのではないかと考えていたが、留寿都でのレースとあまり変わらないような登距離で驚いた。しかし、プレスタートからスタートまでの 1km の誘導が登距離 60m あり、トレインの一番高い場所まで誘導されてから、比較的緩やかな場所を回した後、最後スキー場を少し下って会場に入りフィニッシュというコースであった。

初の海外、初の海外遠征、初レースということで緊張していたが、知らない世界に入り込んだことで驚きや不安、好奇心など、緊張以外の感情の方が多かったため、あまり緊張せずにレースに臨めた。20 分前にプレスタートを出発してから 1km 登っている時に、ここで疲れないようにゆっくり力を使わずにいこうかと思っていたが、液体ワックスを塗る時間や、初レースなので時間に余裕をもってレースをしたいと思ったので、レースの時の 80% ぐらいの速度で少し急ぎながら登った。しかし、スタート地区について液体ワックスを塗るなどしていたら時間がなくなってしまい、スキーの技術がまだまだ足りていなかったことを実感した。結局スキー板を手で持って 3 分前枠に入ることとなり、スタート係のおじさんが優しい方で、板を固定して板を履きやすくしてくれたので、心の中でありがとうございますと言いながら、滑る準備を急いでした。1 分前枠に入るときには、滑る準備も無事終わり、深呼吸して落ち着いてレースを始めることができた。3 分前枠の時に焦っていたため、スタートに無事間に合ったという気持ちのおかげで過剰な緊張もなくなり、スタートは落ち着いて集中できた。

レースも落ち着いて大きなミスもなく、海外のトレインを楽しみながらオリエンテーリングができた。全体的に満足のいくレースができ、「海外の雰囲気

慣れて落ち着いたレースをする」という目標を達成できたので、初日から自分らしいレースをすることができたので非常に良かった。

雪質が日本と違ってガリガリしていて少し氷に近い雪で、その上に少しフカフカな雪が薄く積もっているという状況だったため、ショートカットで直進する選手が多く、非常に多くのショートカットが存在した。平らなテレインに複数ある 5m 程の小高い山、離れていても分かるオープンと藪など、日本ではあまり目印に使わないような特徴物を駆使して、正しいショートカットを選んで滑ることができるかということが今回のレースの鍵であったと思われる。また、日本だと SI のタッチフリーレースがないので、ポストに着いてすぐに脱出するということがより求められるレースだった。



男子スプリント

パシュート

清水嘉人

コース距離： M 6.9 Km, W 5.4 Km

実走（最短距離）： M 9.5 Km, W 7.1 Km

登距離： M 110 m, W 95 m

前日のスプリントでは思っていたより良いレースができ、特に緊張することもなくワクワクした気持ちで臨んだ。スタート前後に道坂選手、1分前にドイツ選手がいたので彼らに負けないぞ、という気持ちだった。

道坂選手にはスタート直後スキー場に出た時点で早々に抜かされたが、延々と登るコースで、誰かの背中が見えることは精神的には良かった。そのおかげかドイツ選手を視界の端に捉えるまで差は縮まり、1ポストまでは別のルートチョイスをした彼についていくこともなく、冷静にレースを運べた。

2ポストに向かう途中、ショートカットをした結果どの道にいるかわからなくなってしまったところドイツ選手に抜かされ、彼についていくことでリロケートをした。このあたりから常に彼を意識してレースをすることとなり、冷静さを失ってしまったのだと思う。2-7がパターン振りのため小さな範囲でループになっていて見にくかったこともあるかもしれないが、2ポの脱出で大きくミスった。その後も彼とすれ違う等したため落ち着く暇を与えられず、結果として4-6-7と回ってしまい5ポを飛ばしてしまった。タイミングよくループの終わりでドイツ選手と再度合流したため、また彼の背中を追って滑りだした。ただ、おそらく「ミスったにも関わらずドイツ人に追いついた」と考え心の余裕が生まれたのか、その後は彼と違うルートをチョイスする（そして、彼の方が速かった）など次第に冷静になれていたのだと思う。9-10でナビゲーションが不要な区間があり、「やっぱりおかしいなあ」と思い地図を見返すと、3ポまで行った記憶はあるがその後絶対に5ポ（2ポと同じ）には行っていない。やってしまった。

気づいて回り直し、完走はすることが出来たので最低限のラインはクリアしたと思う。しかし、他の選手を意識してオリエンテーリングに集中できず、結果

大きなミスをするという自分の悪い部分が出てしまった。致命的なミスをする
 ことは無かったものの、細かなルートチョイスでミスをしてしまう、ネットワー
 クが細かい部分ではありとあらゆる分岐で減速するなど、レース内容は不本意
 なものとなってしまった。フットOでも何回も経験したことがあるパターンで
 失敗し、自分の学習能力の低さを実感させられるレースとなった。

またレース後に地図を見ると、大して複雑ではないネットワークだという印象
 を受けたが、レース中はまるっきり正反対の印象だった。どういう精神状態でオ
 リエンテーリングをするか、地図を眺めるか、で結果は大きく変わるという、オ
 リエンテーリングの難しさであり醍醐味でもある点を、悪い意味で実感するこ
 とになってしまった。

EDUARD P
 1:10 000 e = 5 m
 PURSUIT 23.2.2022

FISU
 WORLD
 UNIVERSITY
 CHAMPIONSHIP
 SKI ORIENTEERING

Made in: 2/2022
 Author (2018): Radim Ondráček (OCAD)
 Revision for ski-o (2022): Petr Mareček (OCAD)
 Chief cartographer: Petr Mareček
 Base maps: orienteering map, ortofoto, DMR 50
 Publisher: © KOS Slavia Plzeň
 Administrator: marketo.berankova@email.cz
 Course by Šimon Mareček

KOS SLAVIA
 PLZEŇ

MAPPY

Bib number:

Category: **men-a**

LÁZNĚ
 JÁCHYMOV

FISU

NÁRODNÍ
 SPORTOVNÍ
 AGENTURA

OF

ČSOS

Karlovarský
 kraj

FISU JÁCHYMOV 2022 FISU WORLD UNIVERSITY CHAMPIONSHIP SKI ORIENTEERING

SPORTident

VICTORIA

Geodetika

edip

ORIENTEERING

Pril

男子パシュート

スプリントリレー

佐野響

最短距離：M(1,3,5)2km, W(2,4)1.8km(6)2km

実走最短距離：M(1,3,5)2.5km, W(2,4)2.2km(6)2.5km

登距離：M(1,3,5)40m, W(2,4)35m(6)40m

太いピステ道 50%：ピステ道 1%：ナロートラック 49%

スプリントリレーは、今までの2レースで使用していないテレインでレースが行われた。当日は雪が降っており、前日の降雪もあって表面に雪が積もっている状態だった。しかし、雪面は固く、ナロートラックでのダブルポールもしやすかった。今回のスプリントリレーは男子が先に出走するという珍しい走順であった。日本からは石原・佐野チームがエントリーした。いつか女子が増え、日本チーム同士で競えるようになればと思う。余談ではあるが石原・佐野で組むスプリントリレーはユニバーシアード 2019、ワールドカップ 2020 に次いで3度目である。Team Official Meeting(TOM)で道の割合が出されていたことで、使用するエリアを予想できた。インターネット上で地図を検索し、夏の道がワイドトラックとなっていると予想した。そして、会場から見て北東部の道の分岐(コントロール番号 33 の位置)が注意すべきところだと事前に考えていた。会場のワックスキャabinは国ごとに用意されているかわからなかったため、前日に粉まで仕上げたが、実際には1面の壁がないが屋根のある小屋が用意されており、現地で十分に仕上げられただろう。選手とオフィシャル2名が1便で会場に向かい、やることもないので小屋で隣にいたエストニアチームのコーチが「ショートカットが勝負の分かれ目だね」などと言っているのを小耳に挟みながらのんびりし、そろそろアップを始めようかというタイミングで残りのチームメンバーが到着した。ウォームアップエリアは、急峻なコースであるため、一方通行で回るよう前日に伝えられていた。身体は温まったが疲れたくなかったため、1周した後はだだっ広い平らなオープン上(地図の北西側の小さな丸いコース)でアップを行った。レース中は隔離エリア内に山本オフィシャルと道坂さんの2名が入り、他3名は写真撮影や応援をエリア外からすることとなっていた。山本さんは走者のスペクテーター(コントロール番号 40)通過を見張って次走者に伝える係、道坂さんは戻ってきた選手に羽織れるジャンパーを渡してスタートワックスを塗って選手を送り出す係を担当してくださった。出場選手のレース結果を見て我々の目標は「①スプリント・パシュートで合計タイムが同じくらいになるドイツチームに勝つこと」「②女子チームのブルガリアチームに勝つこと」「③混合チームのスロバキア・ハンガリーチームに勝つこと」としていた。

1 走は 12 位と好タイムでチェンジオーバー。ポールをおるというアクシデントがあったものの 1 位と 1 分強の差で、集団で滑って帰ってきた。速すぎてレースが終わるまでポールが折れていたことを知らなかった。早めに出走してしまいチェンジオーバーがギリギリだったそうだ。申し訳ない。よし行くぞと意気込んで出発し、マップウォールから地図を取りスタートに向かった。3 ポをタッチした後、気をつけなければと思っていたポイントで 1 本南の道に入ってしまうと 2 分ほどタイムロスをしてしまった。また、6 ポの後には 8 ポ方向に向かってしまうミスがあった。スペクテーター通過するはずなのにおかしいと気付いたから良かったものの、レース中になぜ人は数字を正しく読んだり線を辿ったりできなくなってしまうのか未だに謎である。完璧なチェンジオーバーを終えこの時点で、前方のブルガリア、後方にドイツを感じる距離であった。3 走は 1 カ所のミスがあったが、順位は変わらずチェンジオーバーを行った。4 走はミスなくこなしたが、ドイツチームに抜かれてしまい、前方に雰囲気を感じながら全力でダブルポールを行う展開となった。1 秒を削るギリギリのチェンジオーバーを失敗仕掛けたが、石原選手が手を出してくれたことで無事につながることができた。14 度目のチェンジオーバー、さすがのチームワークである。走力に差があるため、チェンジオーバーに苦手意識はもともとあったが、転んでいる写真が大会 HP にあげられてしまったので、次までによく練習をしようと思ったのはここだけの話だ。5 走は素晴らしい走力でドイツチームを抜かして帰ってきてくれた。ブルガリアチームはミスがあり、1 分強の差をつけることができた。5 走のスペクテーター通過時に優勝したチームのゴールがあり、「湧樹くんもうすぐ来るけど、ゴール見に行きたいなあ」と山本さんが言っていたことをここに残しておこう。6 走をスタートしてしばらくするとドイツチームに抜かれてしまった。最後の数レッグは全チーム同じであると TOM で言われていたため、ドイツチームにパックする形ととにかく漕いだが、距離も長かったことあり追いつけなかった。ラストコントロールに向かいながらゴールに向かうドイツチームを見て、ラストコントロールにパンチし、フィニッシュ誘導を辿りながら後ろをふと振り返るとすぐそこにブルガリアチームの緑のユニフォームが見えた。約 2km を本気で滑った後で出せる最後の力を振り絞り、3 秒前にフィニッシュすることができた。この大会で一番真剣に滑ったのはこのタイミングだったと思う。

結果は 14 位。「①ドイツチームに敗北」「②ブルガリアチームにギリギリ勝利」「③スロバキア・ハンガリーチームに勝利」となった。ドイツチームにはミスがなければ勝てたと思うと悔しいが、レース後にフィンランド(3月の世界選手権大会)で再び戦うことを誓い、熱い握手を交わした。約 2km のコースに 12 コントロールがあり、隣接ポストも多い印象を受けた。50%がクロカンコースだったため、太道の分岐に 2 人とも惑わされてしまった。

スピーディなレース展開になるとミスをしやすくなるが、そのミスが大きな差を生むことになるため、短距離レースではミスが命取りになると改めて考えるレースだった。反省点はあるが、とても楽しくレースを終えることが出来た。これも、ワックスを担当してくれた道坂くん、道具が壊れた時のために板とポールを持っていてくださった山本さん、写真を撮りながら大きな声で応援してくれた木村さん、清水さん、高木さん、日本チームの全員のサポートのお陰である。また、会場では海外選手も「ジャパン！」「ガンバレ！」と応援をしてくれ、スポーツはいいなあと感じることができた。

JAHODOVKA

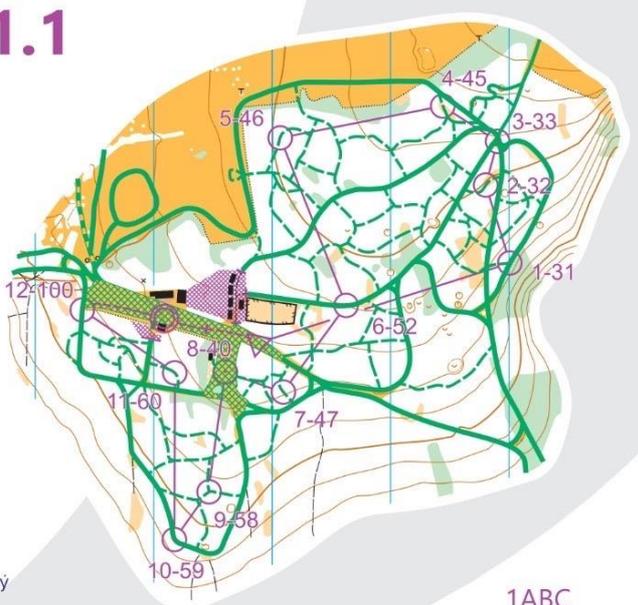
1 : 5 000 **e = 5 m**

SPRINT RELAY **25. 2. 2022**

Made in: 2/2022
 Author (2021): Petr Mareček (OCAD)
 Revision for ski-o (2022): Petr Mareček
 Chief cartographer: Petr Mareček
 Base maps: ZM ČR, ortofoto, DMR 50
 Publisher: © TJ Lokomotiva Mariánské Lázně
 Administrator: bartos@edip.cz

Course by Šimon Mareček

1.1



1ABC



FISU WORLD UNIVERSITY CHAMPIONSHIP SKI ORIENTEERING

JÁCHYMOV 2022 FISU WORLD UNIVERSITY CHAMPIONSHIP SKI ORIENTEERING



ミドル

石原湧樹

大会を通じて最も長いコースだった。男子は最短実走距離 15.2km、登距離 200m と、それまで程ではないものの登りの少ないコースである。マススタートで、地図交換が会場で 2 回あり、コントロール数が 42 と非常に多かった。そのためミドルにしてはショートレッグが多く、半分くらいはスプリントのようなレッグだったように思う。特に南側では、せわしないレースだった。初めの 2 枚がパシュートで隠れていた北側を通過して東から南側に入り、ぐるりと回って西から会場に戻るコース、3 枚目が北側を 1 周してゴールであった。

スタートでは、私は運よく最前列となった。地図を見始めてからの 15 秒で落ち着いて 2 番まで読み切ることができたので、思い切り飛び出すことができた。他の列で転倒があったこともあって前から 2 番目でスタートフラッグを通過しフォーキングに入った。以降は主に集団の中か前でレースを進め、ほとんど集中を切らさず回ることができた。

今回うまくいったことは、方角を意識することである。スプリントやパシュートでは、分岐やショートカットの後に方向感覚を失い、違う圧雪路に入ってしまうことがあったが、常に方角を意識してこれを防止することができた。また、マススタートだったので、周りの選手をうまく利用することができた。自分ひとりでは思い切り突っ込む自信のないショートカットでも、自信を持って突っ込むことができた。

一方で、タイムを失ったのは、先頭で滑っているときに先読みが追いつかなくなり後続に抜かれたところ、またナロートラックで先頭が遅くなった時に抜かせなかったところである。後者はもっとアグレッシブに抜かすこともできたかもしれないが、そうすると地図への集中が阻害されて大きなミスをするリスクがあったので、結果的に良かったかもしれない。

全体的に、自分の実力を十分に発揮できた試合だったと思う。北側ではスピードとパワーを存分に発揮することができ、南側ではミスすることなく高い集中力を持ってナビゲーションを行うことができた。



男子ミドル 1/3



男子ミドル 2/3

EDUARD M **10.3**
1:10 000 **e = 5 m**
MIDDLE **26. 2. 2022** **men**
3A

Made in: 2/2022
 Author (2016): Radim Ondroček (OCAD)
 Revision for ski-o (2022): Petr Mareček
 Chief cartographer: Petr Mareček
 Base: maps: orienteering map, ortofoto, DMR 50
 Publisher: © KOS Slavia Plzeň
 Administrator: marketa.berankova@email.cz
 Course by: Šimon Mareček

KOS SLAVIA PLZEŇ

Karlovarský kraj
 LÁZNĚ JÁCHYMOV
 FISU
 ČESKÝ SVAZ ORIENTEERŮ
 NÁRODNÍ SPORTOVNÍ AGENTURA
 OF
 ČSOS
 JÁCHYMOV 2022

FISU JÁCHYMOV 2022 FISU WORLD UNIVERSITY CHAMPIONSHIP SKI ORIENTEERING

spořitelna, VICTORIA, Geodetika, edip, Jule

男子ミドル 3/3

5. コロナ禍でのスキーO大学選手権大会

オフィシャル 山本 賀彦

スキーO大学選手権大会(FISU World University Championship Ski Orienteering)は、第1回 2016年ロシア(Tula)、第2回 2018年エストニア(Tartu)で開催された。2020年フィンランド(Rovaniemi)は、開催10日前に、フィンランド国内で155人が新型コロナウイルスに感染したため中止となった。今回、チェコ(Jáchymov)でのスキーO世界大学選手権大会は、4年ぶりの大会である。

2021-2022シーズンのスキーO国際大会も、コロナ禍の影響を受けた。2021年1月から12月に延期されたスイスの冬季ユニバーシアードは、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う渡航制限により、開催11日前に中止となってしまった。2022年1月21日から27日に行われたブルガリアのヨーロッパスキーO選手権は、帰国後に5ヶ国30名以上が検査で陽性となり、今大会も開催が危ぶまれる状況だった。2回連続中止にならず大会が開催され、日本チーム全員が好コンディションでレースに臨めたことは非常によかったと思っている。

幸いチェコの流行もピークを越え、各種制限が緩和される中での遠征となり、出国1週間前に8連泊時に必要だったPCR検査が不要になった。また、帰国日の3/1から、チェコが施設隔離3日間の対象国からはずれ、帰国後24時間以内の公共交通機関利用も可能になった。それでもPCR検査は、チェコ入国用と大会バブルに入るための検査を兼ねても、日本とチェコで各1回は実施が必要である。日本政府の検査証明フォーマットに検査結果を記載してもらう手続きには苦労したが、組織委員会から、チェコの検査機関に依頼していただき、日本のフォーマットで検査結果を受け取ることもできた。隣町にあるPCR検査会場へ送迎(往復1時間)も組織委員会にいただいた。FISU主催大会は、現地の空港に到着すれば、空港に戻るまでの移動、食事、宿泊は基本的に組織委員会が面倒を見てくれる大会だった。運営者、選手も全員が1つのホテルに固まっているため、IOF主催大会と比較すると選手団の負担は軽い大会だと思う。

コロナ禍の開催のためか、大会運営で有効活用されていたのが、WhatsApp による event info である。組織委員会からの各種連絡、写真の提供、各国選手団の Q/A に使用された。日本チームから、WAX 台の借用希望を出したところ、チェコの方から借りることができた。Team Box でスタートリストや地図の受け渡しが行われ、General Technical Meeting は期間中 2 回で各国 1 名限定の参加。人の接触が、必要最小限となるように、各所で配慮されていた。Anti-Covid-bulletin が発行され、バブルはホテルチェックアウトまで有効というルールだったため、レストの日も教育プログラム等はなく、当然バンケットも実施されない。大学生による国際交流も大会開催の意義だと思うので、交流の機会が減ったこと残念だった。また、ロシアのウクライナ侵攻が大会期間中に始まり、2/22 の女子スプリント、2/23 の女子パシュート、2/25 のスプリントリレー優勝等、活躍していたロシア選手が、2/26 の最終レースには出場せず、いなくなっていたことも報告しておく。

今大会に向けては、無雪期に強化合宿を 4 回行う等、コロナ禍の中でできる限りの準備を行ったが十分ではなかったと思う。2 年後は、もっと多くの日本選手が大会に参加し、好成績を残せるように、今後は、大学生の競技力向上に力を入れていきたい。2 年後は、コロナの影響や国際紛争がない状況で、選手が思う存分競技や国際交流を楽しめる大会が開催されることを切に願っている。

6.チェコの旅について

清水嘉人

「バブル」が導入されており、基本的には期間中は特急列車とホテルを往復するのみであったが、それでもホテルでの食事、チェコの街並み等を楽しむことができ充実していた。

トランジットのドバイ空港の自販機でお菓子が詰まって出てこない、ドバイーチェコの飛行機では子供がちょろちょろし、非常口周辺で飲み物片手に立ちながら無限にしゃべり続けるグループがいるなど、終始日本との違いを意識することばかりで刺激的な移動だった。また、当たり前のように金髪の男女が多い機内で、「生まれたときから金髪の人がいる」という当たり前の事実を再認識した。ホテルはこじんまりとしており、大会関係者で貸し切りだった。食事はバイキング形式で、スープ1種、とても硬いプラム、白くてかたい謎のデザート以外はどれもおいしかった。おいしい料理で毎回お腹いっぱいになれることはとても良かったと思う。そして、ムース状のジャガイモが予想外においしかったことが意外だった。北海道に住む自分も、もうすこしジャガイモ料理のレパートリーを増やせるのではないかと感じ、とりあえずムース状ジャガイモの元を自分用のお土産に購入した（まだ使用していない）。自分がジャガイモを購入すると、なぜか必ず半分くらいは芽を出す運命にあるため、今回の遠征がそのような扱いを受けるジャガイモの個数を減らすことにつながるかもしれない。

高木一人

私は初海外だったので、すべてが初めて経験するものばかりで非常に楽しかった。まず、ドバイ空港はショッピングモールの中のように、マクドナルドやカフェ、時計やカバンなどの高級品の店、香水の店、チョコレートが多めのお土産の店など多くの店があった。また、英語が得意ではない私は、周りの人の会話は見

事に雑音にしか感じず、多くの人がいたのにも関わらず、日本語での会話が聞きとりやすかった。これは日本に帰ってくるまで変わらず、頑張らないと何を話しているのかを理解できないという状況で、自分の無力さを感じた。

チェコのプラハ空港に着いたとき、食堂のような場所に行った。自分でコックに注文するメイン料理と、サンドイッチやヨーグルトなどのショーケースから自分で取る商品の 2 種類があった。ただ、前者はメニューの名前しか情報がなく、知らない単語もあったので、量がどのくらいなのか、どのような料理が出てくるのかがあまり分からなかった。そのため、チーズと飲むヨーグルト、よくわからない甘いパンをショーケースから取り出して食べることにした。ヨーロツパでチーズやヨーグルトを食べたいと思っていたので、入国して 30 分で早速夢が叶った。

空港とホテル、テレイン付近の移動はすべて大型バスか大会関係者が運転してくれた車だった。左側に運転手がいて、右側を通行するという異文化があり、僕は街並みや景色が見たかったので、積極的に右側の窓側席に座ることを常に心がけていた。空港付近は雪が全くなく、風の強い寒い秋のような状況だった。ホテルまでの景色は、緩やかな少しの高低差があって、波のような地形をした畑が広がっていて、平らで遠くまで見ることができた。言葉が通じない十勝のようで、風景は北海道とあまり変わらないという印象だった。また、ホテルに近づくと段々と山の中に入っていく。枯れ葉が地面を埋め尽くし、木の本数が少なく見通しのいい斜面が道路の横に広がっており、長野県の全日本ミドルロングで見た景色とあまり変わらなかった。あと 10 分ほどで到着するのに雪すらないという景色で、もしかしたらフットオリエンテーリングの大会に参加するのではないかと思った。結局ホテルに着いても雪は積もっておらず、芝生の上に残された雪が少しだけあった。気温も比較的暖かく、北陸のように膨大な量の雪がドカドカと降るというよりは、標高が高くて冬にある程度雪がシンシンと降るといイメージの街だった。

毎日 3 食ともバイキング形式で、未体験の味が多く、新しいものを食べるのは毎回ギャンブルだった。私はこのギャンブルをやっていくうちに必勝法を見

つけることができた。それは、料理の見た目だけで味を想像することをやめるということだ。誰しも美味しいものを食べたいのだから、夢と希望を抱き、たいてい自分の好みの味を想像してしまう。そのためギャップが生じ、そのギャップが大きいほど落胆してしまうのだ。私はそんな味の偏見をしないように心がけ、最初の一口を食べるまでは味を想像せず、少しでも想像してしまった場合は、期待値を下げるために、こんな味だったら嫌だなと想像を上書きしていた。この努力もあって、私はほとんどの料理を楽しんで食べることができた。私が一番気に入った料理はミルクがゆ？というもので、オートミールのような何かが様々な工程を経てとろろのような食感になったもので、そこにメイプルシロップやシナモン、ココア、砂糖などを各自好みの量を入れて食べるというものだった。毎食出てくるデザートは日本とは違い、シナモンの香りやココナッツを楽しむケーキのようなもので、そこまで甘くなく、デザートはハズレが多かった。甘党な私たちは甘くて美味しいものに飢えていたため、このミルクがゆを存分に甘くし、炭水化物を多く摂取することができた。また、フルーツが半分までしか熟していないという状態で、プラムは酸味があり、梨は固く、リンゴは酸味があった。日本人は我慢が得意なので熟すまで収穫を待てるのだろうか。それとも、そういう品種なのだろうか。

7.競技結果

スプリント男子結果

- 1 BAKLID Jorgen (NOR) 12:00
- 23 石原湧樹(日本) 14:24
- 32 清水嘉人(日本) 19:41
- 33 道坂怜生(日本) 19:49
- 35 高木一人(日本) 23:23

スプリント女子結果

- 1 RIAZANOVA Olesia (RUS) 10:13
- 32 佐野響(日本) 18:26

パシュート男子結果

- 1 BAKLID Jorgen NOR 28:14
- 23 石原湧樹(日本) 36:03
- 30 道坂怜生(日本) 54:57
- 32 清水嘉人(日本) 61:35
- 33 高木一人(日本) 66:26

パシュート女子結果

- 1 VIATKINA Marina RUS 24:07
- 32 佐野響(日本) 57:33

スプリントリレー結果

- 1 ロシア-1 49:12
- 2 スウェーデン-1 49:58
- 3 スイス-2 50:43
- 14 日本-1 69:24(石原湧樹/佐野響)

ミドル男子結果

- 1 MULLER Nicola (SUI) 47:23
- 15 石原湧樹(日本)52:34
- 26 道坂怜生(日本)68:43
- 27 清水嘉人(日本)73:42
- 高木一人(日本)失格

ミドル女子結果

- 1 Eliane DEININGER(スイス) 42:46
- 1 NIGGLI Alina(スイス) 42:46
- 26 佐野響(日本) 66:42

8.大会風景



ベルをいただきました



ホテルアストリアに宿泊しました



ミドルのマススタートです。石原選手



ライバルのドイツ人との交流。道坂選手



スプリントリレーのチェンジオーバー。石原選手と佐野選手



全体写真

9. エントリーと遠征費用について

オフィシャル 山本 賀彦

(1) エントリー

スキーオリエンテーリング世界大学選手権のエントリーは、締切が以下のよう
に設定されていました。

General Entry / 一般エントリー (参加意思表示)	: 大会開幕 3 ヶ月前
Quantitative Entry / 数のエントリー (参加確認)	: 大会開幕 2 ヶ月前
Individual Entry / 個人エントリー (参加者連絡)	: 大会開幕 1 ヶ月前

最終的な出場選手選考は、2021/12/11,12 に開催された「世界大学スキーオリ
エンテーリング選手権大会 2022 日本代表選考会」で行いました。参加資格
は、1997/1/1~2004/12/31 の間に生まれた大学生です。

個人エントリーでは、パスポート、写真、在学証明書の添付が必要になります。
在学証明書は、大学の公印を押印後、日本ユニバーシアード委員会(JUSB)の公
印も押印するため、JUSB(JOC)に提出が必要です。1/5 に提出して、押印完了
の連絡が来たのが 1/11 でした。締切を意識して余裕を持った提出が必要です。
また、参加費を全額払い込む 1/末のタイミングでワクチンパスポートの提出も
求められました。

(2) 遠征費用

世界大学選手権参加にかかる (かかった) 主な費用は下記のとおりです。

(1€(EUR) ≒130 円、1 Kč (CZK) = 5.12~5.35 円)

① FISU 登録料 20€/人 (選手、オフィシャル)

※4 月に JUSB(JOC)から JOA に請求が来る。

②参加費 70€/人・泊（選手、オフィシャル）

※1泊3食の宿泊費、プラハ空港－ホテル間の送迎、
ホテル－競技会場間のバス輸送。2/20-28 8泊 560€/人。
海外送金手数料が 2,000 円×2 回=4,000 円。

③海外旅行保険

FISU、JUSB(JOC)、JOC より本人の責任で加入するように指示されています。
クレジットカード付帯保険は、傷害治療、疾病治療、救援者費用が十分でないこ
とが多いので、海外旅行保険に各自で加入して参加しました。保険会社、補償内
容（金額）、既往症や持病への補償有無、旅行期間により保険料が変わります。
ヨーロッパ 11 日間で 4,000 円～14,000 円程度。

④航空運賃

成田－ドバイ－プラハ（Emirates 往復）

2021/12/23 決済 合計 87,900 円

（航空運賃 62,100 円、燃油サーチャージ等 16,280 円、
税金・手数料等 9,520 円）

2/19 NRT-DXB EK319 22:30 - 2/20 5:30

2/20 DXB-PRG EK319 9:10 - 12:55

2/28 PRG-DXB EK140 15:30 - 3/1 00:25

3/1 DXB-NRT EK318 2:55 - 17:20

日本とドバイの時差 5h、日本とプラハの時差 8h

※今回の遠征で、他に使用したルート、航空会社

関西－ドバイ－プラハ（Emirates 往復）

成田－ドバイ－プラハ（Emirates 片道）－ヘルシンキ（Finnair 片道）

※エミレーツ航空の航空運賃に含まれる手荷物と超過手荷物料金

共同装備があるため、追加手荷物料金が必要になることがあります。

預けられる手荷物 学生 35kg/人、一般 25kg/人

機内持ち込み 7kg/人

追加手荷物料金 ~10kg (事前払い) 17,130 円

⑤日本国内移動費用

・自宅－成田空港往復

・自宅－関空等

⑥PCR 検査

・成田国際空港 PCR センター 事前予約 25,000 円等

※木下グループの安価なPCR検査でも問題ありませんでした

・チェコ国内でのPCR検査 1,553CEK≒8,000 円

※日本フォーマットに転記してもらうため、2日後に検査結果を受け取る検査にできず、割高な1日後に検査結果を受け取る検査を受けた。転記料金も割増でかかった。プラハ空港でPCR検査を受け、医師による検査結果確認を希望すると、300€かかるので、それと比較すると安い。フィンランド移動組はチェコでのPCR検査はなし。

⑦その他

2/20 昼食 (空港レストラン)、2/28 昼食 (空港レストラン)、

水、バナナ、補助食、おみやげ、ポストカード、切手代、

チェコカップ参加費 230 Kč/人 等

10.寄付金報告

本大会では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって中止となった 2 年前の同大会(フィンランド・ロヴァニエミ)の際に以下の方々からいただいた計 255367 円のご寄付を選手全員の参加費に充当させていただきました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

ご寄付をいただいた方々(五十音順)

安達利雄様

石原拓巳様

荻田育徳様

加納尚子様

岸祥太郎様

木谷弥彦様

酒井佳子様

高橋美和様

茅野耕治様

戸田星人様

平野弘幸様

堀江守弘様

山本賀彦様

11.日本チームを支えてくださったみなさまへ

道坂怜生

今回の大会参加にあたり、私たち日本チームは、多くの方々より様々な形でご支援、ご声援を頂きました。この場をお借りし、心よりお礼申し上げます。

今回の学生選手権大会は2年前に新型コロナウイルスの影響により中止になってしまっていて以来、実に4年ぶりの大会となりました。そして今回の日本チームは、世界戦初参加者と複数回経験者が混在していました。各選手に対し、トレーニングやレースに関するご助言や、用具のサポート等、多くのご支援をいただきました。大会期間中は、メール等を通じて応援メッセージをくださったほか、ライブ映像やGPSトラッキングを用いて観戦、応援していただきました。これらすべてが日本チームにとって大変大きな励みとなりました。

大会参加にあたり、申込みや助成金申請等各種手続きをスキーO委員会の皆様に行っていただきました。また、木村さんと山本さんにはオフィシャルとして現地に来ていただき、試合面だけではなく生活面でも様々なサポートをしていただきました。多くの方の支えのおかげで選手は無事に渡航し、競技を終え、帰国することができました。

また、チェコ現地のボランティアの方々にもお世話になりました。プラハ空港にてお出迎え、そして空港からホテルまでのバスでの送迎、また、新型コロナウイルスのPCR検査のために車で検査会場まで送っていただいたりもしました。今回の大会は前回までと違いウイルス対策を徹底しなければならなかったため運営面でも苦労があったかと思われませんが、優しく対応していただきました。

日本チームを支えて下さった方々に、チーム一同、改めて心からお礼を申し上げます。皆さまに、日本チームをサポートしてよかった、楽しかった、と少しでも感じていただけたなら幸いです。そして、まだまだ伸びしろのある選手たちが、今後どこまで速くなれるのか、興味を持って見守り続けていただければ、これほどありがたいことはありません。

2022年スキーオリエンテーリング世界大学選手権報告書

発行日 2022年4月5日

編集者 道坂怜生

発行者 公益社団法人日本オリエンテーリング協会
スキーオリエンテーリング委員会